

## 外国人の受け入れ

豊澤 幸平

昨年十二月、「エッセンシャルワーカーの不足」を投稿、外国人労働者について少し触れた。今回はもう少し外国人の受け入れについて考えたい。

日本全体で人手不足により逃した機会損失額は約十六兆円。機会損失だけならいいが、人手不足が主たる原因と思われる企業倒産数は、二〇二四年で三〇九件と過去最高と。

他先進国同様、日本の人口も減少の一途をたどっており、将来も益々加速、改善は殆ど見通せない。従って、経済成長や社会制度の維持の為に外国人数を増やしその活力を取り込むことは不可欠である。生成AI、先端技術、ロボットの活用、生産性の向上等も必須であるが、国としての土台は人の数と考える。

日本に現在、中長期にわたって滞在する在留外国人は約四〇〇万人。ここ数年、増加のペースは上昇。日本人数はドンドン減少、それを外国人で一部補う構造が定着。日本政府も外国人政策を見直し、「特定技能」等の制度を変更、日本語教育、地域社会への参画促すオリエンテーション、共生への体制整備等を進めている。

一方、昨年十二月にも少し触れたが、日本人の外国人への潜在的不安が根強いことも事実である。昨年八月の日経新聞の記事では、「外国人の受け入れを広げるべきか」と日本人に問うた結果、「広げるべき」は四五%、「広げるべきでない」は四六%と拮抗。この背景にあるのは、オーバーツーリズムの弊害、外国人のゴミ出しなどのマナー違反、犯罪による治安悪化への懸念、海外からの投資に伴うマンション価格の高騰等である。これらの指摘は必ずしも正確ではない部分もあるが、感情面で不安を掻き立てている。

国力≠人口ではないが、「これからも外国人の力も借りなければ益々日本はやっていけない」と考え多様性を受け入れたい。二〇三〇年頃の若者に、「おじいちゃんの時代はJapan as Noi。お父さんの時代は失われた三〇年だったがまだGDP世界第四位。僕たちの時代はGDP第十位だね。どうしてくれるの!」と言われたいようにしたい。

(二〇二六年六月)